

## Special Essay

## 洋書の思い出

小児科学講座 山下 裕史朗

私は匂いフェチではないが、小学校の頃から父の部屋にあった洋書の医学書の匂いが好きだった。内容は全くわからなかったが、ぺらぺらめくってみると、日本の本にはない大きさと高級な紙質に加え、何とも言えないいい匂いが洋書からはしていた。「あーアメリカの匂いがする。」とアメリカに行ったことはなかったが、そんな空想をしていた。少し大きくなってから、天神の福ビルにある丸善に連れて行ってもらう機会があって、いい匂いがする洋書売り場は、お気に入りのコーナーになった。Lifeの写真集や星の王子様の原著など見て、空想の世界が広がった。今でも丸善の洋書コーナーによく立ち寄る。

医学生になって JIMSA に入部した。日本の医学書も紙質の良いものも多くなって、特に朝倉の内科書など紙質は良かったと思うが、良い匂いとは感じなかった。父（山下文雄名誉教授）から同級の JIMSA 学生 7 名で小児科の本の翻訳下訳をしてみないかと誘われた。米国の小児科医 Fulginiti の著書 *Pediatric Problem Solving* であった。文章はなかなか難解で学生にとってはチャレンジングではあった。訳者あとがきに「まず久留米大学医学部の JIMSA 所属の学生諸君が下訳し、久留米大学小児科の医師たちがさらにチェック、訳しなおし、その全部につきわたくしが『意味のわかる日本語?』にすべく苦労を重ねた。」と山下文雄名誉教授が記しており、学生一人一人の名前が書いてあったのが嬉しかった(小児診断のすすめ方 臨床問題解決法、医学書院 1986)。その頃、洋書の医学書は、アジア向けの廉価版の教科書があり、紙質は良くなく、匂いもなかった。廉価版と言えば、1989年パキスタンに行った時に、医学生がぼろぼろになった廉価版ハリソンを持っていて、記載内容を正確に暗記していたのには驚いた。日本の医学生は日本語の良い本が山ほどあって恵まれすぎている。

今は、図書館に行って文献を探すこともなくなったが、昔は図書館に自分で足を運んでコピーして文献を集めていた。1990年頃、留学していたヒューストン、ベイラー医科大学の図書館に *Kurume Medical Journal* がちゃんとあった。懐かしくなって思わず手に取った。匂ってみたかは覚えていないが、よく利用した久留米大学医学部の医学図書館の海外論文閲覧室が目につかんできた。本は読む物であり、電子版でも目的は達成できるが、自分は手に取った本や雑誌の匂いや紙の肌触りが忘れられない。